

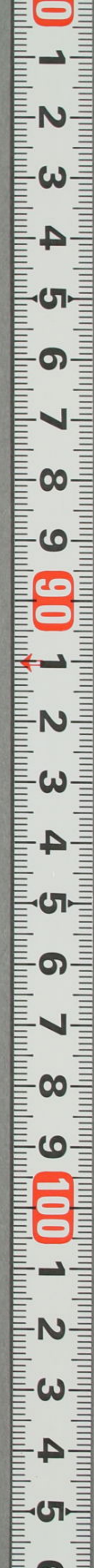
敵討裏見葛葉

五

~ 13

3958

2



門へ13
號3958
卷2



歌討裏見葛葉卷之五

曲亭馬琴戲編



一篠反橋小道満識神を走らんと并童子
續命の法を授かる事

さても保名の葛の葉田子小童よりを委ねた仇人なるの
漏れ入るを憚りてと勘平とて召つとて詰朝とて信太
さうちちと洛小起死加茂保憲の嫡男光栄の家小到りて又
保明が信太庄司と茅千枝九が横死のりかきふまむねら七
あく演説しとく白狐が告ぐるの木末芦屋道満の男と茅が

葛葉卷五

仇人ある石川悪右衛門といひしものも千晴が殘黨近江太田逸
澄あるは且帝血腦の所祈ふるよせ調伏しと申すらんを
を潜小訴ゆえ一が光榮大少將とて保名が忠孝と感激の
あまり亡父保憲より多く保明が死後の勤當を免し
ふやう道満が悪慮を輕死小わさざれといまざる證據あけ
せの卒尔披家入るも又仇を報つるも一易うとて
且く旅宿小退れとて音耗たまつべしと仰せられ保名は
と控ひてその夜光榮の家より互あるとて一襦袢袴を來
しとて控ひしとて殺の癖有橋の左右よりさし控り

以拔つとて切てりね保名も抜ゆとて切結と寡の衆小敵
一とて既小數箇所の深痕を負く尾居小控と倒るは今まで
ありける癖者へも跡あり消るやと四方髪ある大男と一人の
奴隸が小血のまぐる太刀刃引提ぐ保名が倚小まるとり
そのは瘻小苦むをさるく彼大男とくとお笑ひつ小保名
けが男の仇人とを索ねる石川悪右衛門入道とて道満と
るはとてはねを討たふ今宵加茂光榮が家小倒るは
示し合せりつりあるもの告るものたよとてこれ甲夜
より此とてはねをもち茶衾尼天の法術とて殺の癖



悪右衛門入道
道満八術
カクアヤシ
癩者保名
そつ困る係
んを頼く保
名と反撃了



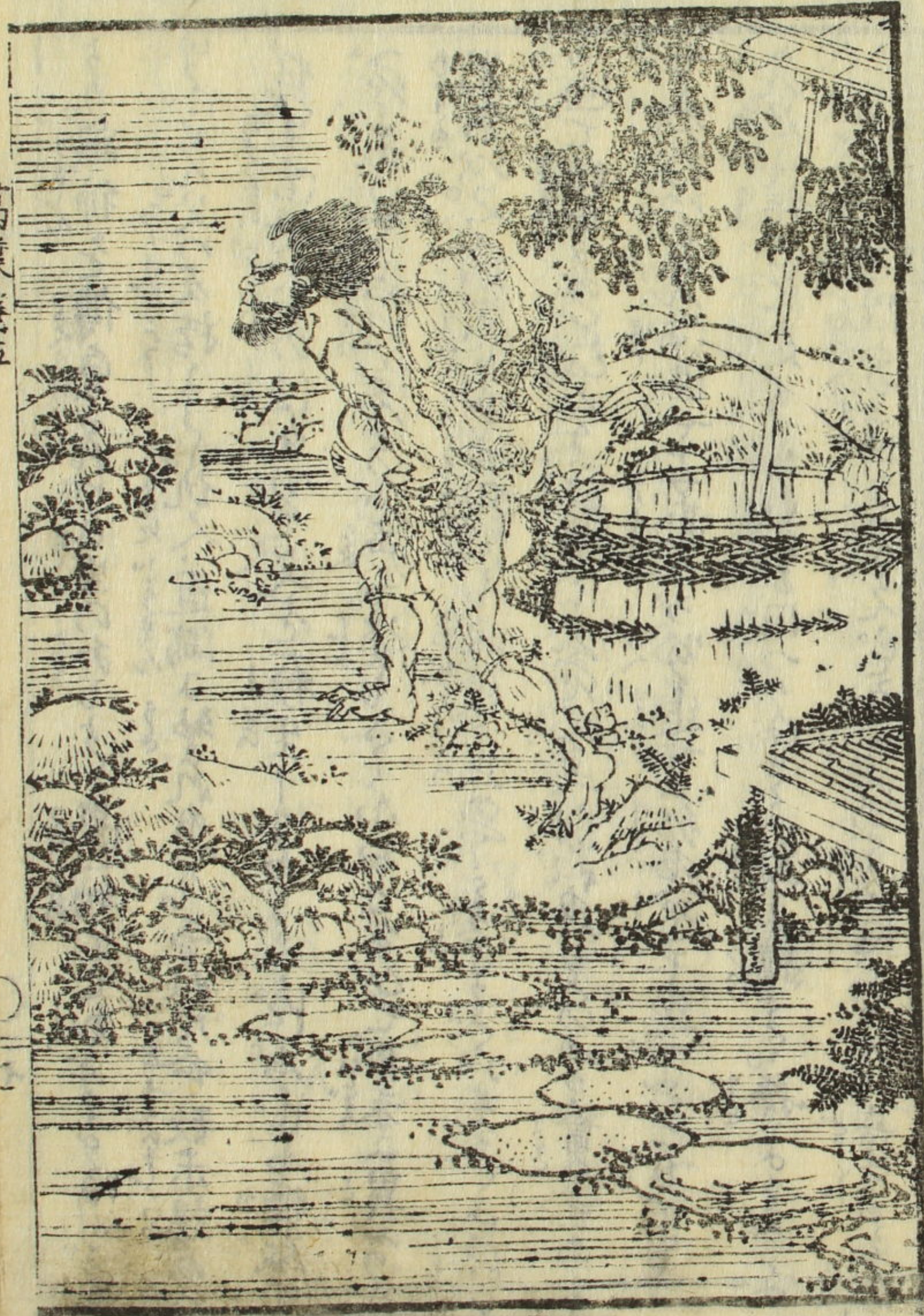
道満奴隷
殿平小保名が
を埋めくこせとて
保憲が封にあたる機神と
うする

者敵當如くもんとて輒反撃せしむ。後の患を除くものあり。
いふ小僧も今も今もあつて成佛せよと欺ハ保名
ゆゑ歯を切りさす仇人悪者集つてありつるも人々皆
悟り秘書を汝が小僧にその法術小僧の能くしひひ
あつてもめつと知るるも朽き一も數箇処の瘻けけ
らうとも一太刀ささぐわつたあつて刀を杖小立あがり
めたく打てかきづつ溜りて撲地と蹴倒し忽地足下小楚
と踏居胸めとちく刺とせど鮮血あがきと泉のどく保名も
冷小息絶る。道満ハ莞念とて血刀中一拭ひつ朝小せと

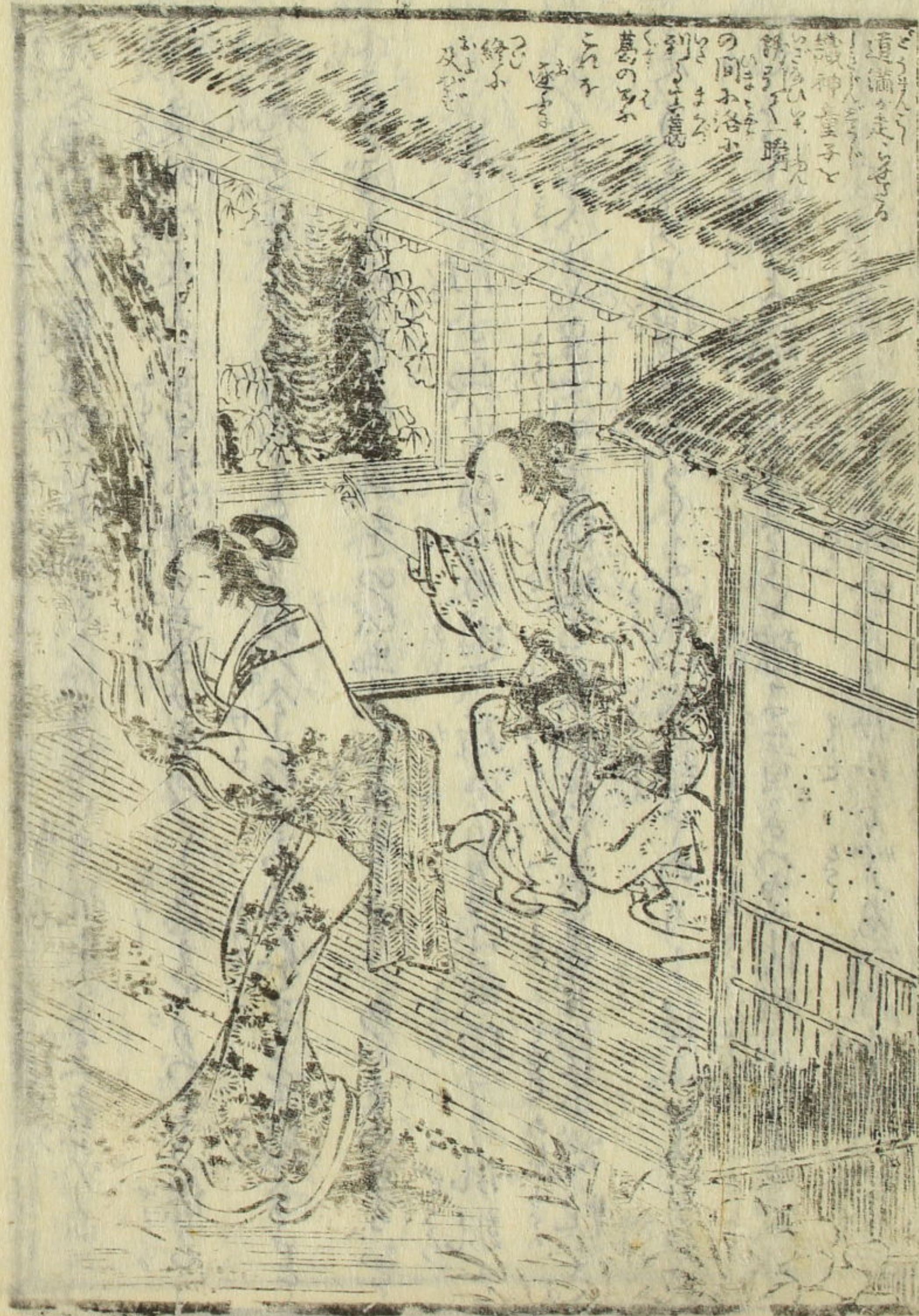
保名が懐をの探して彼玉をも棄ひたり。奴隷辰平ハ耳小口を
めせくこの死骸人のまゝぬ隙小くせとけハ辰平とるを返
かぐ川中へ投入せんとするを道満とちく。洛ハ海遠く
今又川ハ個々時あり。縦川ハ押あがきとせしむ。辰平
小足とく彼処をぬく掘穿く埋めと下知とせしむ。辰平黙頭て
左右をえり。橋のりり小一皮小高死処あるを見究竟くと
く。とくく掘ると四五尺小及びと死土中小物の碎音と
一道の金光忽ちと閃起昇る。中天まぐ消せとけハ辰平ハ更
道満ハこの光景をえとちく怪し袖の裏小籠つ。小鷲た

いふやう今土中より走らせりてその識神あらんむか加茂保憲
識神を使役して天地の時斐々たるをききしれどもその
器量あはれれどもを侍るとは私慾ありて人の禍せんを
怖れ終小の思その人をも怖れむと彼一なりとあつるが
憲の処小識神を封じておとせんとせむ。それとて或曉らざりて
徒小走らせりてを女らぬ彼識神人小あるとあつるれいふ
その人の右小出ると朽をきく後悔せむとあつる小とせむを
返平も縁故をばしてと遺憾ありとせむとあつるを。又君
をうらあはれむとあつるもそのうらあはれむとあつるを。保名

屍を埋とつり舊の如く小土をうらあはれとせむとあつる
時泉列信太の首由紫母子童子をうらあはれとせむとあつる
音耗をうらあはれとせむとあつる。今朝もとあつるを。保名
はのぼり。母子とのめをいひおとす。互ううらあはれとせむとあつる
も童子のいひおとす。遊小居たりとあつる。俄頃風颯と
あつる。まゝく童子を撲沈と吹倒れ。首由紫母子慌忙と
走り出く抱死入る。頭小昏絶とあつる。経よのうらあはれとせむとあつる
悲しくあつる。鍼とせむとあつる。隙小音よへ急比懸り。九右と
えうらあはれとせむとあつる。保母を母もあつる。保名



吉原長五郎



通備を走らざる
織神堂子と
勢よく一瞬
の間に浴小
のうまき
其のうま
こころ
及ぶ

識神を傳受とれば百里の所もく際物として知らるる事
 ならずん父の反務もく仇入道満は殺れぬ。されば命救未喝ぬ
 惟生活續命の法をりて父を獲生すかろまじ。志は猶慮す
 ぶらあひてわのえとの声も姿もすこふとあびて。田未は異うの
 光承はるる小生の苦も甚由も思ひ。思の命も落す。いそぐの法い
 して種すのどびうの放遣らる。父を討れぬ。うのが實をある
 ちかひのちと見はほやと勘平がゆ。道平はゆ。田未とあひて
 足小信せと走り出ぬ。おほつらるる。跡は續く。孫よるか
 とはひせと。往方遠よええびとありぬ。さうほどく。童子の識

神の通かふる。須臾の間小洛へ走り。まづ加茂光榮の家小まぬ
 こく。父保名が反橋まで返駈せしれ。秋勢又道満が走らせ。識
 神をば。そのひひく。去り。るる。をり。の。生。活。招。魂。續。命。の
 法を獲。く。父。以。蘇。生。の。且。帝。の。御。物。性。を。讓。と。あ。る。べ。し。
 の。知。り。く。道。満。を。吾。父。子。小。討。せ。ぬ。の。を。奏。し。受。え。ぬ。り。と。中
 せ。く。光。榮。以。官。警。馬。嘆。し。ま。父。保。憲。世。の。ま。そ。り。時。は。い。は。し。
 ぬ。ひ。る。其。の。年。某。の。月。日。七。乙。の。小。見。さ。か。家。の。末。ん。能。う。が。直。指
 の。弟。子。あ。く。識。神。を。授。め。の。等。用。あ。る。と。待。せ。と。宣。ひ。が。い。は。し。
 つか反橋のり。識神を封じぬ。汝が生をす。らぬ。ひ。る。小。こ

と父が未然を察せしとて露をひらるも天あり命をりしる曆の道
ふこを信受く餘の術いもうせびさうば汝續命の法を信しとてその
夜腹心の家諱をねく童もとてに反橋小到也が童もい父が埋
られざる処小千通夜法を信し曉小及びくその屍を掘り出さるに
保名い忠忠と蘇生く切られざる太刀の痕さ小ええむ只是夢の
覚るる持せりやと伴ひりりく光栄まづ縁由を審小説示せし
保名天小説ひ比よ喜ひ光栄の深沈惠と童もが道よ長るるを
感激しとて己まづりく光栄の目撰政實頼公もあがりて信太
庄司を倍保明がるるを初とて保名童もが信太の白狐がらまを

も首尾を演説しとて中屋道満の田原を晴は族黨まて近江
太郎逸澄ととりりぬの被姓名を石川悪右衛門と変く矢田部定邦小
冠せんと謀しとたまうくのありとて千枝丸が横丸庄司が轂めりし
る夜もけえとてまつる彼今御恨の祈るるめを朝家を領奉
らんと謀るる保名が子童もが訴るるを彼童もがは幼女とて
識神を使役しとて道満が小討せとるるを蘇生あせしる
後のみれあり畏られど帝の御物怪をも輒く禳せんとすをれ
はまづ試よそのを存せし御物怪頭は除くらんよ公私の幸
こみくらのるべうぶこの功をりく被亦又子小道満を殺せしを

の仇を報せぬらんかと云れぬが實頼公おぬらぬぬひくかと云
 實頼公の道満の由り朝敵これ私の怨成以討たりの小あ
 らぶといふも彼童子が女を殺りて。年未の御怒せと云せ
 まらん仇報のゆゑの切心損之謀ありは但彼を母幼年を不
 ろく諸郷歸伏せしむるれ明日道満と童子は百をせその樹を
 誅と筒様と小謀るるゆゑのゆゑの童子は父のものを俱して時をた
 ぶまのりゆと仰せぬが光榮と云るをゆと撰政殿を退出り。
 七歳の児成を割と道満を討んと請ふ。内多 兇賊
 首を授て童子は衰るる家を興て事

木九

かく加茂光榮の次の日保名と童子をねく撰政殿よりい
 藤原清方も首を禀と道満を俱くまありつその時實頼公
 の諸郷を集會まづ保名をいかり藏をせり。かく道満と立皇
 の席伺候せり。實頼公左右をえりて帝年来御怒ありあはく
 をりく麗とせぬる。全く物怪の形あるべしと諸社諸山
 小仰せり。祈禱ありと云。さて験もえぬが又頃日清方の
 吹舉小あく陰陽師道満小御禊のると命せり。小又是效を奏
 するを得と云。小陰陽頭加茂保憲が弟ありて。母倍仲磨が



あつちの
女侍童子
道満と隠謀
あつちの道
満既小生
狗とれん
隠
形の時
の術



さうして
のれき
光栄保名
この席
藤清あり
行

葛葉巻五

後流る保明が孫七歳の童子あり。彼より物怪を禳せんと請ふ。彼の保憲が高弟より信太庄司晴俊が為るも外孫ありとていづる。らび人の過る不むんを冬年の長女ももらむと道小園なる女。く勝りつとまむに道満と童子が術を試んぬるにせむとの。諸郷をまらむべしと答ぬ。活知小一の童扈従一ツの箱を。扛のく出づる。實頼公これを道満童子小市に。箱の裡ある物を。筆ひぬと似もゆぬ。道満との声小雁とて冬瓦と土器ありとす。童子。みし土器と蛇ありとす。さすもち蓋を開くふとある冬瓦と土器と。ゆりて清方をそく冷笑ひ童子が筆ちふづり。黄口の孺子とて。

冬一とて童子もまらむ色もあく冬瓦ある。既小道満がゆ。つひに並小易れをめて。姑く彼小護をその瓦の中小蛇あり。破らそく小蛇と中す。小諸郷半信半疑、あをを先榮とまらぬ。ゆりての瓦を破せり果しく中。小蛇あり。實頼公汝を。ゆりてをえぬ人とも駭然としく童子が神機數算を嘆賞あふ。まに清方也地小蛇は。道満の面ちあつてけり。処をまらむ。時小童子席を避讓ぐ中。帝年未御極のつとあふ。別小御。被成つらまらる小及也。是ハ先帝後泉院の御宇。田原千晴征伐の。とて天田部判書清原定邦が合捕する千晴が家の名剣を定邦。

小賜の素あり。彼劍千晴が又秀郷が龍宮よりひきよめのある
よる武徳もあて定邦がよ小落しう。彼人愈比狂人となりてこ
まの禍を患せり。畏れねそのひ過上り入小係をたすか
當今圖馳い久く御悩めしと申すこと。彼劍を秀郷が本國
下野小遣し一社の神小多うぬ御悩立地がたてしと申すを
トス實頼はけ食々眉も頼め彼劍が過つる年悪右あつたあ
の盗去せり。定邦訴すことあり今これを百のせん
まも轍くおんくんと宣ひ童子又アスオその劍の外を求め
小及の今日とせざる道満小仰せしきをもぬ。彼石川悪右あつと

はと一ら定邦小仕その家成とあんと謀を童子が外信田
庄司小曉られ當り小庄司を切害とて天田部を生奔し和泉路小
く不意も童子が父保名が秘書どもをひきうら播別小逃ら
く陰陽師とあり更小芦屋道満と名告せり。の彼今をら
小陰陽の道を説も金鳥玉兎籃籃内傳茶抵天の法書小
の件の劍の彼が懐小りしとてとてくひるる今とひてもひむ
道満の童子を白眼くをせ孩思物も狂人行をくくまを石
川悪右あつちりしとてとひもさうさう保名席下りのつとまあ
りしとて道満は反橋もくられを然り頼めとぬ。あつと石川悪右あ

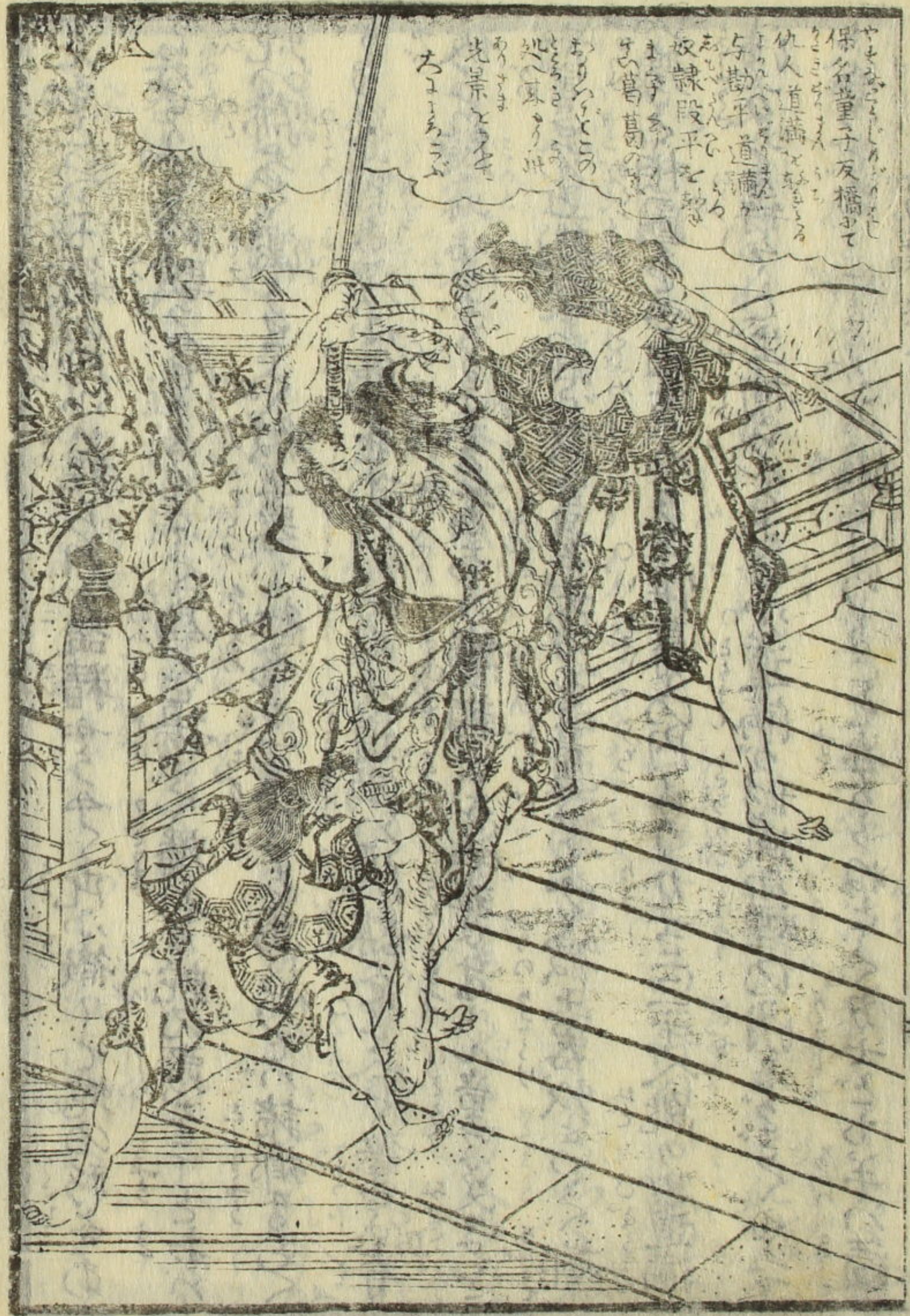
入道道満と稱せり。これ幸小童の續命の法を授けし事なり。蘇
主の母を殺されしをわづらひ陳ざる事なり。道満の呆れを以て然りと
し口を閉じてあしむ。童よりくくも笑てその一件の事私の怨
の元道満の平晴が強黨近江太島逸澄とひひのめくきうね
くも朝家をさうと奉りて謀反とてさうもきうねの方人を殺す
ふく然止せしが今度御侍の命をせられたる故幸小童も調伏
一奉ると謀るものとさうふりてこれ殿下小童の賭小童とせし
土器もさうもつら道満が御袴の糸小用ひるさうのめくこの土器
小蛇の生血を引くるを調伏の秘法なり。この血土器小童の

えとどいとも箱の内小龍られ。鹽精をさく此小徹して蛇の形を
らる。その験をせんさうと扇を揚ぎ蟠れる蛇の頭を丁とわ
蛇の跡を流る。彼土器小紅ある一文字をあらわし諸郷も
ちり道満の頃小態をあらわす。道満の隠謀をまへ童の省
破られし事。小童はあつ實頼公を殺し童の父を
や害せんとし。ちりくき色あるを童をさし彼土器以てく擲
の豫と相圖をや定りたる。惟幕の内より力士三十人跳り出。道満
清方を斬りて生拘らんとす。小童道満が形風小煙の流るがくめ
ちりくあり。ちり。二の漏らしることをまへねとく力士どもまの清



甘藷巻五

十五



保名重子反橋にて
 他人道満とせしむる
 与勘平道満が
 故隸段平とせしむる
 ますか
 子葛葛の
 おりて
 此へ返りし
 光景とせしむる
 右よ

十四

方と巖く縛め羊と道満が往方以素人ともまらぶを童子忙
 く押さぬ彼道満小に術死得く腕さるともつれ又とを縛
 られ只打捨てぬぬととも洛中を出るあつた思の討は仇人
 小譲るべしお母えと只今仇殺の行を彼と斬く道満を討とら
 彼剣をも進せんことをねがうとせし實頼公あつて感
 得しあつて復讐の免許ありと刺二の太刀以保名童子小賜れ
 父子小飲ひく既小退先とよると光栄保名童子小討く彼道満
 も茶祇尼天の法術をひられ等閑の敵小あつて漫しく過せ
 ころつれ童子うけぬり彼法入を征するのをもく己に防ら

中いりてあつて外組信太庄司も茶祇尼天の法を後
 彼りのあつて小討とらぬ今小討とらぬ剣をどう復
 次しといもあつて道満へ術をひら
 必其脱也三部の秘書をも携へて一條反橋へさうりく小
 なる路をれと只とまといとあつて巷をかたつたつ時をう
 清処小保名童子あつてお扮く前後より一様とらぬ道満
 彼れ網の鼻に潔く名告あひく勝負を決せるといれ道満
 回答もあつてあつて走るとする小の術はとらぬと連
 信とあつてとと冷笑いられ逸澄といれ昔より敵

受く後れをとうと況は又子のとたれい百入りかとも質とも
とたれい見知せよとのたれた太刀成内りし抜放せ保名父子荒介
とく天下のたれ朝敵あり又まがたれ家の仇たれ漏さしとたれ
とく道満とを物ともせとまが挑と戦ふれも道満の奴隷
平の素後れとくこの処走り来つ保名保名後まのり声取も
くけと破れんとするとたれ勤平も又まを慕く来とくかか
とく跳くも抜ももとたれ平が首をすとおれとたれ道満の
とろぬと力と引て脱んとするを初太刀保名三の太刀童子
腕小切とあり首切切とたれ勤平のめたれとくそれ

今朝光栄の成亭に到着し小父子のを審小父の撰政殿
りつるあを待する小仇人道満を討とんる小直小友橋と走む
あふを告るとれあふとくつめとあふ走来れりと語も
ねれをゆと直葛のたれ童子を追鬼つあるともと
洛上り以今と小ひあひと眼前の光景を又縁由を
故る更小はあふもわとく保名白瓶の宝珠と三部の秘書
とも復し道満が首と宝剣とを推く撰政殿あり審小仇を
軽むる為体をゆえなれい實頼公まなく賞美のり道満
が首城へ使廳とこれあぐ六條河原梟とく又藤清方

と云厳しく。弘明しく。謀反の餘類を穿鑿せらるるといふも全く道満
の千晴が孫黨あると云ふと。且その術藝のとらねるをり。吹
率いせし。そのを陳べた。ととも罪科終小脱せ。て遠國小配
流せられ。が年を種く。勅免のり。る。ととも。後小實頼公の悪を
入道道満誅伏の。且秀郷が宝剣の縁故を矢田部定邦へ仰ら。と。
俄頃小勅使を下野へ。とられ。彼劍を一社の神小ある。と。よ。し。を
命らる。今の誹来天権現これあり。と。ふ。あ。る。小勅使件の宝剣と。推
之。洛をら。ち。え。ける。日。より。帝の。小。遣。忍。比。小。平。愈。ま。り。く。る。こ。を。不。思
議。あ。ら。と。ふ。又。矢。田。部。定。邦。の。年。來。更。病。小。ち。う。さ。れ。生。死。不。定。小。と。く

のり。と。保。名。又。子。の。り。自。批。の。り。と。も。一。五。十。を。信。げ。ば。と。ま。ん。く。先
非。を。悔。め。の。り。保。名。小。彼。を。を。受。楠。本。の。社。を。再。建。し。と。を。納。め。又
千。枝。九。が。小。正。資。庵。よ。一。宇。の。堂。舎。を。建。立。し。と。あ。ぐ。と。の。追。善。を
終。し。る。功。徳。小。や。の。り。後。の。り。病。本。復。せ。り。と。ら。ね。楠。本。の。神。社。や
小。小。灵。驗。掲。焉。貴。賤。を。運。ぶ。の。り。と。あ。ら。と。の。神。社。の。東
小。信。太。明。神。と。せ。あ。り。と。は。あ。ん。素。乃。益。鳥。尊。あ。り。と。も。又。大。歳。神。伊。怒
姫。を。娶。く。生。ぬ。い。つ。と。大。山。作。を。あ。ら。と。し。と。い。ふ。こ。の。兩。社。と。の。間。遠。り
ら。と。ね。楠。本。の。神。を。信。太。明。神。と。い。ひ。の。あ。ら。の。り。の。し。め。る。と。や。世。小。保
名。と。の。心。也。と。も。草。紙。小。あ。ら。と。の。信。太。の。神。の。灵。驗。を。稱。せ。り。と。い。ふ

ら言の中小寶言のり。まどのの中小虚言のり。まどく物語のり書
 まあれり。まどくを是とまどくをまどく。又逆賊頭
 小誅伏。御悩立地小母こころせあふ。是彼童まどく績あれり。笑
 頼公かゝ天聽と孫あひく。童まどくと天文博士小あされ。そのち
 播磨守小任せり。まどく外祖庄司晴俊と祖又保明が名の一
 字と象り。まどく女倍清明と名告る。まどく哀なる仲磨の家を
 興。又母小つらく至孝あり。まどくまどくその名海内小洋溢。
 その厭勝の妹小娘のまどく。宇治拾遺今昔物語まどくもいへ
 られ。まどく詳まどくと。清明又清小考とまどく。金鳥玉兎集

蘆蘆内傳を筆削き。まどくまどく世小の書を清明が他ありと
 いふ。又保名葛のまどく母も九十餘歳の上壽をまどく。子勸平も
 緑のまどくまどく。まどく忠義を盡し。まどくまどく風を追ひ
 影に捕る。其譚あり。まどくまどく善以將。悪を懲らんとを本
 意。まどく。漫小楮毫をまどく。まどく。

敵討裏見葛葉卷之五畢

此篇之曲亭主人の作北斎子の画因る。一時燈下の戯
 墨主とまどく巻をひく。童子勸懲の一助とまどく。幸甚

東都書賈 中村屋幸藏上梓

大坂心齋橋通
 南久寶寺町
 伊丹屋善兵衛
 源平盛衰記
 後太平記
 四國軍記
 續武將感狀記
 聖德太子傳圖會
 畫本西遊全傳
 繪本玉藻譚
 同白狐傳
 太田道灌雄飛錄
 補正行戰功圖會
 駿臺雜話
 殘太平記
 源平盛衰記
 軍書小説類藏板目錄

軍書小説類藏板目錄
大坂心齋橋通 南久寶寺町
 伊丹屋善兵衛

源平盛衰記
片假名
 廿五冊
 後太平記
片假名
 廿五冊

殘太平記
同
 十二冊
 四國軍記
一名土佐軍記
同
 十二冊

駿臺雜話
平かな
 五冊
 續武將感狀記
同
 十冊

室鳩巣公相の著述を不可得に仁義の大なるを以て鬼神の流和漢古今名流勇士の言行を評述し其の要諦兵法和歌詩文の備後老儒の見あり
 聖德太子傳圖會
平かな
 六冊

補正行戰功圖會
平かな
 十二冊
 畫本西遊全傳
 四十冊

太田道灌雄飛錄
左衛門大夫太田持資入道を源三位に授け政敵の後追つて若谷上杉氏の家臣となり文武の英才を祖と稱する一世の戦功志業を委しくし
 六冊
 繪本玉藻譚
 五冊

同白狐傳
一名白狐傳
 十冊

復讐言石見英雄録

全部 五十冊

此書三編より八作各替りて四編以下廿九冊一家の秘筆として記しし石見氏を以て通編結説の主人公として論じて冷水堂の五傑と称する事士の傳記として由良俊の賊後討滅天橋立の復讐を本編の作者の新案を著せし七編は結局として餘計の巻あり八冊を以て一部とす

刀筆青砥碑

八冊

此書水鏡語の藤亭子の原稿を曲亭翁の筆削せし事藤亭子の叙の匠人名を劇亭漆て愛妾於妹を殺し独り奸夫偽二席を購りて盗賊と誣せしめて殺さんとせし事青砥藤綱の明断各その罪を照て懲せる佳話妙案とす

虫小室の八雲

八冊

下野の生岡城主の生聖の家長平四郎國記が忠心遠謀の事新平五郎が妖術妖婦を殺し其の事平五郎を面に向ひし事

鎌倉年代圖會

五冊

於於御鎌倉の創業より宗尊親王の下の事あまふまで於て將軍家五代の間の時事を委くする也

鎌倉大樹家譜

五冊

此書親王鎌倉を治りし事累世物権様西心の大塚北條が二門亡びて後醍醐帝天下を平定しし事

武藏坊辨慶異傳

十冊

羅世中が水滸傳の面目を摸て變化する説向ふれば甚奥ある小説なり

大内多々羅軍記

六冊

大内義隆の義者風流より壁長相良義隆が倭智浪人服敵を服し隔れを妻を君と進

世俗のつひりて傳ふる安般の安泰と善華のつひりてこれらく他は手紙なり

繪本金花談

十二冊

同 雪鏡談

十二冊

同 二鳩英雄記

十冊

同 彦山靈驗記

十冊

同 龜山話

十冊

同 合邦辻

十冊

同 淺州靈驗記

十冊

同 金毘羅神靈記

十冊

同 誠忠傳

十冊

同 孝感傳

十冊

同 顕勇録

十冊

同 奇縁傳

十冊

同 忠孝美善録

十冊

同 伊賀越孝勇傳

七冊

三冊 檀之二葉

六冊

むら 妖婦生釣の方より 蘭尾張の時買が
大悪逆を正史に出入せる面白は稗史あり

近江縣物語

五冊

花山院の侍代あると坂上梅木が金儲けで
盗賊なる保輔壽の志が残暴に橋を世が
女園生が貞操安世が常々邪慾膨病の
梅木がこれに光るは詔で城征伐
の大將軍を保昌を助けて賊を平らげ
近江揚子進又生の父母の逢い 佐佐木でその
文の妙ありて初巻一

昔語松虫墳

六冊

運命の及ぶ河原野の勇士野田太郎
武勇掛子と母狐が奸細安井軍太が限
悪田勝美義里と母田の志は木は海八が妻
松木が狂女信平が郎が神崎の悪女木木が孝心
松虫墳塚などの由来とあり

今昔二牧繪州紙

六冊

天文の頃とよ 藩磨三木の城主別所長宗の
花崎兵衛夫妻と女子とありて 後山松が
遠原勇虎が 松三郎が 門が 高
村の能優が 義を説く話とあり

忠孝貞婦傳

六冊

大庭信實信澄八波田坂右衛門が女計
て自害し妻の里見と忠誠を田助が貞烈
忠勇をて寛と雪たし子あり

復讐言子丈松

七冊

近江の士松井逸馬源入藤村大佐が欺殺
れを弟兩人と三年 冤罪家を成し五月柳佐市
との友とて 阿波の海村にて志と遂に借

忠孝人龍傳

五冊

奥州山田屋の長藤崎三郎右衛門とあるもの
十田民を欺て松田伊濃に斬せしむ松
田夫婦と民が牙民強が義死に是を冤魂
民が子民五郎とある童は憑て復讐
させしむと據せり

二葉片梅

六冊

誠意の表城池上七九郎が克己の孝子
菊女と上田三郎が復讐の小説にて西少
年岩見三之丞義徳の老人を敵敵するを
を綴りあり

十かえり花

六冊

建久年中 出羽の山縣の卿士常盤井内記
藤則二男龍二郎良人仙御に誘れて教
け後年諸事を助けて父の仇を山伏山
仙女去来見と昇天する奇事あり

楠家彌生佐久屋

六冊

楠家の長良内地左近が女児弥生と佐久屋八
幡の佐倉兵庫が狂死を子添一郎が胆勇敵寺の
敵を除け又津田の里ある 福富が女児白雲と
遇ねる事と 騙細 秋山大膳が 録及八尾雷
童丸が滅亡源八幡の子孫とあり

花標因縁車

五冊

小瀬半左衛門と小倉と彦を併せ
迷ふ煩悩の常念法師が及下の家の因縁と
怪くあり

玉搔頭

五冊

三老の櫛の玉と王とある話にて上野の國
高井土の兵服十左衛門長太郎の意を再奪せん
と上方に出て百方と拵れ終り三百鎧両の金
と携へて路指打山賊と強盗を四郎と

筑前の士人東條園書幼年して父助を
夫が仇山中狂三郎を年久く伺ひ捜り後
小和州郡山より復讐せし事実を添
て路常の傳奇を紙に記すあり

南部 小栗忠孝記 五冊

敵討 奥州南総の士竹内教吾日藩に勤奉る士
小栗忠孝の行状を記し人をして射殺させし事
小栗が復讐を助けし事後世に傳へし事あり
阿波守が討き至の妻子を告妙くせて小栗
を二郎小栗と名を改めし事あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊
和漢の雜事何れを載せし事あり
益軒の雜事何れを載せし事あり

金屋金五郎全傳 五冊
浪花坂の市人金五郎が風流ありて氣使
り南波額の小公徳実の情を乞ふにたゞ之を
半時留る所を癖性あり可夫き浪花半時庵
に居りて郷人あるの事あり

輪廻物語 五冊
安倍仲麻呂古伝大臣の浪唐より安倍と
喜美が中明の海を渡る事あり俗傳の
事ありて張本と浮屠陰陽両方あり
鏡を附合し小鏡荒唐にして架空の結構
あり和漢の史外に出し奇話と云ふ

風流茶人氣質 五冊

繡像復讐山石見英雄録 全部 五十冊

南海 玉藻主人 編輯
浪花 紫雲斎川芳梅 画

○初編 系師人作 七冊 玉藻主人詞著
○二編 玉藻主人詞著 三編 良湯子嗣著 第四輯以下作者一家
永禄天正の頃筑前名嶋の勇士岩見重太郎橋本李が生さるより武者修治
せし世の武功大蛇の害を除去老狸の妖を斬り勇威を振る後天の橋立あり
廣瀬成徳大川小三入の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し後小室町懸小奉仕に任官
し浪本至水正は後世に傳へし事あり
給し黨の五雄と稱する勇士の列傳靈猿悪魚の怪談亦五輯より八益入儀境新話あり

南史寶寺町心齋橋小入

浪花書肆

前川善兵衛藏

